中央情報通信

発行日　毎月15日

大日本生産党機関紙

第1428号　令和８年４月１５日号

強欲資本主義に陥ってしまった日本……本紙編集部……1

読者投稿　北朝鮮の主要目的が判明か……3

統一教会、ついに解散命令……4

本　社　〒847-0871　佐賀県唐津市東大島町19-5
電話 090－3199－8446　no.shin.7771008@gmail.com

賛助購読料　年額 3,000円（年10回発行）
ホームページ　http:// 大日本生産党.com/

発行所
中央情報通信社
編集長／谷田　透

強欲資本主義に陥ってしまった日本

本紙編集部

「今だけ、金だけ、自分だけ」という利己的幸福追求が強欲資本主義の基本である。他者に対する思いやりは、よほど余りが出た時だけ気紛れに「施す」ものであり、三食を二食に減らしてまで奉仕するものではないのだ。昔は恥ずべき思考や行為も、今では「上手に」「得に」「我も」という括りとなり、憧れの先進価値観になってしまった。

大リーグで大谷翔平選手が伝統的な日本人の姿を見せていても、単なる清涼飲料水的効果しか与えていないようだ。「美しい日本の精神」だと評価しているのもまた「強欲資本主義先進国」の人々であり、それに疲れて卒業したい人々なのである。その先進国である日本や台湾・韓国などは、これから渦の中心に向かってグルグル回って行くのである。

「強欲資本主義」の敵は、思いやりの心であり寛容の精神である。何故ならそれは「今だけ、金だけ、自分だけ」の基本理念に反するからである。神や仏の心は、出世の妨げであり金儲けの邪魔になる。日本は伝統的価値観を入れ替える、歴史的ターニングポイントに立っているかのようだ。

◇

帝国主義と選民主義は世界平和の敵だと言われていたが、そのご本尊たちは早々と強欲資本主義に変身した。遅れてきた国は先進国の「食料」にされてしまった。

パレスチナもウクライナも戦争の終わりが決められないまま、新たにイランでも戦争が始まった。戦争はオープンセールで客を集めながら、閉店セールの日程を決めておくものなのだ。でなければ、セール商品を求める客が「もっと、もっと」と欲を出して幕が引けなくなってしまう。戦争は軍事力という実体と、政治という空想で成り立つ。

◆アメリカ中間選挙のゆくえ

その強欲資本主義の盟主国アメリカでは、十一月に中間選挙が行なわれて共和党議員たちのサバイバルゲームが始まる。トランプ大統領を認めるかどうかの点数を付ける意味で、共和党の議員や首長たちは有権者のコントロールが出来るのかどうか。

そのアメリカで一月七日、ミネソタ州ミネアポリスでソマリア系の不法移民を取り締まっていたＩＣＥ(移民税関捜査局)が、取り締まりを妨害していた移民自由化を訴える左翼活動家「オブザーバー」のメンバーの女性を射殺するという事件が起きた。この女性はＩＣＥの取り締まりが始まると笛を吹いて不法移民たちに知らせていたところ、もみ合いになってＩＣＥの発射した弾丸に当たってしまった。

しかし、この事件がトランプ大統領の命令で共和党が移民排除のために「逮捕に抵抗したら射殺も止むなし」という許可を出していたらしいとネットで騒がれ、中間選挙では共和党の票を減らす原動力となる模様だ。

この流れに乗ったのが中共である。トランプ大統領がベネズエラ次期政権に対して

「中国が恐ろしくて何も出来ないのなら、アメリカが直接ベネズエラを運営して中国を排除する」と表明して屈辱的敗北を受けた仕返しに、中米諸国に向けて「反米運動をネットで拡げる」工作をやり始めたのだ。十一月には何らかの結果が出ることだろう。

十一月の中間選挙でもし共和党が敗北すれば、トランプ大統領が昨年十二月に発表した「アメリカ海軍を百倍強力にする黄金艦隊構想」（ゴールデンドーム計画）に急ブレーキを踏むことになってしまう。この計画は、新たに三～四万トンの戦艦を二〇～二五隻建造して、極超音速ミサイル、レールガン、高出力レーザーなどを装備させて、空母打撃群と両輪で世界制覇を目指すものだ。

敵のミサイル攻撃の防衛構想は「ゴールデンドーム計画」で完全に防げる予定だ。ゴールデンフリート艦は一隻一〇〇億ドルと発表されているが、全構想の実現にいくらかかるかは議会にも連絡が来ていない。共和党が中間選挙に敗北して、この構想が止まれば、喜ぶのは誰なのか。

また中共の習近平が頭から湯気を立てて怒っているのが、台湾に対してアメリカ製の最新型兵器を一一一億ドル分売却すると言い出したことだ。この中には高機動ロケット砲システム ハイマースが含まれ、中国人民解放軍が台湾に攻め込めなくなってしまうのだ。

◆台湾統一地方選挙

その台湾も十一月に統一地方選挙を予定しており、民進党が苦戦しそうだと言われている。与野党対立だけでなく、与党内でも内紛が起きているそうで、賴清徳総統が新年談話で「中国の軍事的野心に直面しており、内輪揉めで消耗する時間はない」と叫ばなければならない現状なのだ。

年末（十二月二十九日～三十一日）に中国人民解放軍が台湾を取り囲んで、軍事演習「正義使命二〇二五」を行なったが、台湾上陸の為の演習だったと公表し、それを受けて台湾政界は大揺れになっている。

この演習が年末に行われたのは、解放軍上層部が「十一月の統一選挙の直近でやるべきだ」と言っていたのを、習近平が「そんなことをして四月に訪中するトランプを激怒させたらどうするつもりだ」と激怒し、軍ナンバー2の張又狭をクビにする騒ぎに結びついた。軍上層部で習近平に意見や苦情を言える者は居なくなった。

習近平は巨大な軍事力を台湾に見せつけて、ゆっくりと台湾世論が「台中戦争反対」になれば、統一選挙から総統選挙に向けて両岸関係の和解が進むと考えている。そうすれば台湾には一発のミサイルも撃つことなく無血占領できるというわけだ。

賴清徳総統は、野党の国民党と民衆党が延々と展開している「反独裁、反専制」「台湾の民主主義を守れ」という国民運動がゆっくり盛り上がってきたことを、かなり恐れているようだ。

次の総統選挙は二〇二八年だが、今年十一月の統一選挙の結果によって「政権交代」が見えてくる。賴清徳としては、早めにトランプと安保条約を結びたいところだ。それと同時に在台米軍基地をスタンバイしたいので、誘致工作が激しくなってきている。

◆韓国統一地方選挙

前大統領を無期刑にして、李在明大統領

は驚くほど上機嫌が続いているそうだ。

「極左」「北のスパイ」「汚職要人」などと保守派からは言いたい放題に罵られていた李在明だが、天下を取ってしまえば無理が面白いほど通るのが世の習いだ。大統領選挙に敗けた者が行くことになる刑務所へは行かずに済んだので、敵国だと言い続けてきた日本と握手するようにアメリカから言われると喜んで手を出した。敵国が困った時に、日本の経済力と金融力、そして自衛隊が応援に飛んで来てくれることを夢見て、高市首相と笑顔で握手した。日本国内の「嫌韓感情」が薄らいだことも味方して、李在明の韓国は日本に受け入れられつつある。

星の巡りが良くなると調子に乗るのが韓国人のDNAだから、案の定、李在明も調子に乗り始めた。

北朝鮮の労働党機関紙である「労働新聞」は、公式のプロパガンダ情報紙であることは周知の事実で、これまで韓国政権は一般国民の購読やSNSへのアップを厳しく禁じていたが、李在明はそれを解禁した。金正恩の行動や言説を知る権利が国民にはあると言うのだ。

それと真逆に、韓国から風船でドラマのDVDなどを飛ばす行為には刑罰付きの禁止を出した。しかも法律まで作って…。

余りにも北に甘い大統領に対して、保守的な国民だけでなく警戒の声が上がり始めている。ポピュリズムの国では、世論こそ神の声であり、このままでは六月の統一地方選挙で与党が敗北するかもしれない。

李在明の六月に向けてのウルトラCは、金正恩と高市首相の電撃会談をセットしようという計画らしいが日本側も拉致問題解決のために「日朝会談は不可欠」と言っていた手前、渡りに舟の呼びかけになり、韓国・日本・北朝鮮の三ヶ国の首脳が一堂に会し、オブザーバーとしてアメリカ大統領も列席するという構想の実現性がどれほどのものか、お手並み拝見である。

◇

こうして強欲資本主義で先進国が動いていく時代、日本だけ取り残される訳には行かない。毒を喰らわば皿までで、日本も強欲資本主義の風呂に漬からねばならなくなっている。

取り敢えずは、関係の深いアメリカ、台湾、韓国の選挙情勢と世論の動向を見ながら「高市丸」は進路を決めることになるだろう。

読者寄稿

北朝鮮の主要目的が判明か

匿　名（元外務省勤務）

北朝鮮は金日成の革命によって建てられた共産主義国家であるが、今の三代目になって「金王朝」として正統な檀君の直径王朝を名告ることにした。神の子孫だとアピールすることの意味を、我々日本人は歴史の中に見ることができる。

徳川幕府が家光の時代になって「生まれながらの将軍」という存在が出てきたように、北朝鮮も「三代目王朝で正統性は認められる」と思っている労働党幹部たちは多いだろう。北朝鮮は自身を日本の歴史の写し鏡だと言う人もいるぐらいで、源氏の血

筋を名告る幕府、将軍が何百年も続き、それらは何千年も続く朝廷に認められることによって正統性が保証された歴史事実を重大視している。それが明治維新の革命にも軍部独裁時代にも持ちこたえ、第二次大戦後には全速力で立ち直って「焼け跡から世界の一等国へ」と発展した。これを北朝鮮に当てはめて、日本が歴史的にミスをした部分を上手く修正しておけば「自立自尊のままで世界指導層になれる」と信じている。

昭和十六年の時点で、日本が原爆を開発していたら歴史はどうなっただろう?というのが、金正日の時代から出てきた話題だということを注意しておくべきだ。

今の世界で、他国の主権を踏みにじって侵略や虐殺を繰り返すのはアメリカ、ロシア、中国そしてイスラエルくらいだろう。つまり、北朝鮮金王朝が永続する為には、核弾頭とワシントン、モスクワ、北京、エルサレムまで飛ぶミサイルさえあれば良いのだ。日本の失敗を、北朝鮮は他山の石として学んでいるというわけだ。

北朝鮮の孤立を恐れない外交や、周辺国に敵対的感情をバラまくような態度に激怒する人は多いが、よく考えてみれば、大正時代から我が国の政治家・財閥・軍部の姿勢にも似た共通点があるのではないか。「神に選ばれた民族だ」と尊大に振る舞っていたのは、夜郎自大の武士団には逆らうなということだったかもしれない。

現在の日本でも、仲の良い外交官たちが集まって情報交換することがある。前記のような話で怒るような日本人は仲間には入れない。「それで結構だ!」と怒るようでは、我々はまた同じ歴史を歩むことになろう。

統一教会、ついに解散命令

文科省が申し立てていた統一教会の解散に対して、ついに最高裁は「解散命令」を発出した。山上事件で安倍元首相が殺されたことから大きく流れが変わったこの問題は、結局「安倍元首相への過度の忖度」が原因だったことになる。

安倍元首相の力が、その生命と同じサイクルで動いていたことは、死去した途端に議員、官僚が一斉に掌を返して統一教会を批判し始めたのを見れば明らかだ。生前には「安倍案件」と呼ばれるほど、安倍事務所から統一教会に協力要請が出されていたという。この両者の密着関係にすがっていた者たちにとって「忖度は基本ルール」であったのだ。

四年前の参議院選挙では、統一教会の田中富広前会長に安倍事務所から「何が何でもウチの井上を頼む」と泣きつかれ、統一教会の全国の集会に田中会長が連れ回って信者に頼み込んだこともある。

文科省が東京地裁に統一教会の解散を申し立てた時の文科大臣は、統一教会兵庫県の顔だった盛山(安倍派)その人だった。「安倍先生に迷惑がかかってはいけない」という忖度が、子分たちの間で稲妻のように走ったものと思われる。

統一教会と自民党がギブ&テイクの時期もあったろう。ただ安倍元首相への忖度は働いたものの、統一教会に忖度する者は誰もいなかったという結末になったようだ。